名古屋芸術大学研究紀要第38巻　179～194頁（2017）

保育内容の理解を深めるための育児体験マンガ活用
― 特に保育内容「環境」に関連して ―

Effective Use of Childcare Mangas that are Based on Comic Artists' Personal Experience for "Child Care and Education", especially "Environment"

茶谷　薫　*Kaoru Chatani*
（音楽学部教養部会）

「保育内容」とは

保育士や幼稚園教諭の養成課程では、学校により科目名の違いは少しあるものの、「保育内容」の複数科目が開講される。これらは幼稚園教諭や保育士を目指す学生が履修する教職科目かつ資格関連科目である。当然、教員免許や保育士資格の所管官庁たる文部科学省と厚生労働省の「幼稚園教育要領」[1)]と「保育所保育指針」[2)]に基づいた授業内容となる。

前者には「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は（中略）幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものである」とある。後者では、「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場で」あるため、「保育は、子供が現在を最も良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」とする。以上の基本認識の下、幼稚園では「生きる力の基礎となる心情、意欲、態度など」の「ねらい」が設定され、５つの領域が明示された。それは、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」「健康」、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」「人間関係」、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」「環境」、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」「言葉」、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」「表現」である。同様の項目が保育所保育指針の「教育に関わるねらい及び内容」でも挙げられた。

以上の５領域は互いに関連し合い、小学校の教科にも跨り、人間として社会で生きていく上で必要な、総合的な力を培うことそのものと謂って良い。幼児教育や保育に携わる専門職を目指す学生は、５領域をそれぞれ独立した５科目として学び、「保育内容」の総合的な科目も履修する。

保育内容「環境」とは

"保育内容「環境」"（学校により科目名の差はある）は、「幼稚園教育要領」では第２章

の「ねらい及び内容」に、「保育所保育指針」では第３章の「保育の内容」にある「㈡教育に関わるねらい及び内容」の「ウ」に、それぞれ以下３項目の「ねらい」が記されている。１つは「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」、次は「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」、最後は「身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」、である。

これらを更に具体化した「内容」は、幼稚園教育要領では11項目、保育所保育指針では12項目であるが、それらの多くが共通している。前者での「内容」は以下である。⑴自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く、⑵生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ、⑶季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く、⑷自然などの身近な現象に関心をもち、取り入れて遊ぶ、⑸身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする、⑹身近な物を大切にする、⑺身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ、⑻日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ、⑼日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ、⑽生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ、⑾幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。いずれも子どもの生活に関連する、様々なそして重要な事柄ばかりである。

保育所保育指針では①安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする、②好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ、⑥自然などの身近な事象に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする、⑦身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く、⑫近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する、が幼稚園教育要領と異なる部分であるが、⑥は⑷と、⑦は⑸と非常に近く、①と②と⑫も含め、乳児をも保育し、かつ授乳や食事が重要となる福祉施設としての保育所の機能を示すものでもある。また保育所保育指針の③、④、⑤、⑧、⑨、⑩、⑪は幼稚園教育要領で記された⑴、⑵、⑶、⑹、⑺、⑻、⑼と同文である。

これらの「ねらい」と「内容」は、無論、「幼稚園は義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」という学校教育法第22条と、保育所保育指針の第１章「総則」「２保育所の役割」にある、「保育所は（中略）子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性と（後略）」することを基盤としている。

保育内容「環境」で保育士や幼稚園教諭を目指す学生が学ぶべきことは、他の４領域同様、子どもが幼稚園や保育所で身に付けることが期待される「生きる力の基礎」であり、小、中、高、大等の教育機関における学びの根本的な力でもあり、社会でより良く暮ら

し、社会を改善していくために不可欠の基盤である。この科目の学修を通じ、将来関わる幼児のみならず、学生自身がもう一度、幼児や保護者の視点で保育や幼児教育について広く見つめ直すことと同時に、それを客観的に分析し、幼稚園や保育所の環境をより良くしていくための考える力を涵養することも欠かせまい。

保育内容「環境」と家庭

乳児や幼児は人生開始間もない時期の人々である。彼らは、卒園した後の義務教育課程やその後の教育、そして社会人として、保護者としての長い人生が待つ、「人のはじまり」の地点に立っている。そのため幼稚園や保育所は、人間として必要不可欠の基盤を養う、重大な責任を負っている。

ところで乳幼児が育つ場は、幼稚園や保育所だけではない。家庭や児童養護施設なども甚だ重要な成長発達の場である。そのことを表すように、幼稚園教育要領は第１章の第２「教育課程の編成」で、「幼稚園は、家庭との連携を図りながら、（中略）幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成するよう（中略）幼稚園教育の目標の達成に努めなければならない。幼稚園は、このことにより、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとする」と述べる。保育所保育指針は第１章の総則「２保育所の役割㈡」で、「保育所は（中略）保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に（中略）養護及び教育を一体的に行う」とする。どちらも家庭との連携を重視すべきとされているのだ。虐待の発見に限らず、保育士や幼稚園教諭は家庭のことを良く知る必要もあろう。

一方、そうした職業を目指す学生の大半は、二十歳前後の若者である。現代日本では、ほとんどの学生が、自身の家庭においては、保護されるべき「子ども」としての過ごし方しか経験していない。社会の大きな変化のため、従弟妹や甥姪、近所の幼児などの子守を経験したことのない学生も少なくない。このような学生にとり、家庭で見られる乳幼児の様々な姿、遊びなどの活動はどのようなものかを保育内容「環境」を学びながら知ることは欠かせまい。それにはボランティア活動などで児童養護施設や乳児院、幼稚園や保育所を訪れる活動が非常に重要だが、書籍等で学ぶことも有用だろう。

このとき乳幼児の動作や家庭での「環境」を書籍の文章や写真で把握するだけでなく、観察眼の鋭いマンガ家の手による作品も軽視できないと考えられる。マンガ家は絵を描くため、制作時にヴィジュアル的な資料を必要とする。例えば、大和和紀がかつて『源氏物語』を『あさきゆめみし』というマンガ作品にした際、平安期の衣装や建物を描くことに苦労したため、様々な所に出掛け、スケッチや写真撮影をした経験談を披露している[3)]。このような経験を積むマンガ家は、観察眼が一般の人々よりも鋭いであろう。更にマンガ家は同じことを変わらぬ視点で描くばかりでは、作品がマンネリ化するため、思考力も要求される。こうした人々の視点や思考は軽視できない。学生がボランティアや実習等で子どもに直接触れ、様々な書籍で子どもや子どもを取り巻く環境を知ることに加え、子育て

のマンガ作品を読めば、得られる知識や考え方は更に豊かになると思われる。

本稿では、子育てを実践した、もしくは実践中のマンガ家による、数多の子育てマンガのうち、夫婦共々マンガ家である吉田戦車と伊藤理佐が描いた、『まんが親』（本稿執筆時１～４巻刊行）[4]と『おかあさんの扉』（本稿執筆時１～５巻刊行）[5]という二作品に描かれたエピソードの中で、特に保育内容「環境」で学修することと深く関連しているものを一部紹介し、考察する。

子育ての実録エッセイマンガ

マンガはかつて子どもを対象とした、他愛ない、場合によっては宿題や読書の邪魔をし、子どもの健全な発達を阻害する害悪、と認識されていた[6]。ところがマンガ読者の子どもたちが中学校や高校を卒業し、大学生や社会人になってもマンガを愛読し続けるようになった。同時に、児童マンガのマンガ家や出版社が、ファンの成長に合わせ、思春期の若者、大人を対象とした作品を出すようになり、現在は、大人がマンガ作品を楽しむことは全く珍しいことではなくなった。中には一昔前の時代劇ドラマのような内容の作品もあり、高齢者に親しまれるものも存在する。

子どもだけではなく、大人も読者として想定するようになった作り手側が、子育てや保育の実体験をエッセイ風のマンガとして作品化する、ということは二十年以上前から行われてきた。それは全く不可解なことではない。マンガ家は小説家同様、登場人物も場も実在しないフィクション作品を描くことも多々あるが、ノンフィクションや、身近な体験を戯画化したエッセイ風のマンガ、実体験を元にした、かなり現実味のある作品を制作する場合も少なくない。そのため、女性マンガ家が、妊娠・出産・育児の喜びや苦しみ、戸惑い、驚きなどをマンガ作品化することがあっても当然だろう[7]。またマンガ家が体験談を作品にせず、エッセイとして綴ったものが、NHK でドラマ化されたこともある[8]。

マンガの読者側にも、妊娠・出産・育児でマンガ家と似た喜びや苦悩を抱える大人も当然いる。そのため、こうしたマンガ家による体験談は主に出産を経験した女の人々を共感させ、その心を捉えている。無論、妊娠や出産をしていない人々も、「こうしたことが子育ての場であるとは驚いた」などと、未知の世界を覗き見るような心地で作品を楽しむ場合も少なくなかろう。妊娠・出産・育児以外をテーマにした体験記、例えば海外旅行や留学生活、会社員や看護師などの生活を描いたマンガ作品が、読者に様々なことを伝えて好奇心を満足させ、現実とは異なる体験をしたような気にさせることと同様である。

生物学的に出産して母乳を出すのが女のため、育児を描いたマンガの多くは女性マンガ家の手による[9]。無論、父親や男性保育士としての立場から描いた作品もある。近年は Twitter やブログなどに実体験をマンガにしてアップロードする、所謂商業マンガ家ではない人々の手による作品も人気がある。こうした作品が紙媒体（マンガ本）として出版され、また Twitter での言葉による呟きを原作としたマンガ作品も出るようになった[10]。

夫婦それぞれが描く子育てマンガ

1963年生まれで、1985年に雑誌デビューした吉田戦車は「不条理ギャグ」と呼ばれる作品を幾つも著してきた。小説や映画、ドラマなどと同様、マンガのアイディアを出すことは非常に難しいことだが、特にギャグマンガ家には、お笑い芸人と似た苦労がある。吉田はその世界で長く連載作品を送り出せている稀有な存在であろう。吉田は一度、結婚し女児をもうけたが、離婚し、娘は元妻側で育っている。離婚後長く経った2007年、6歳下の同業者である伊藤理佐と再婚し、2010年1月に女児を授かった。次女は長女と14歳の違いがある。妻となった伊藤も再婚であるが、子どもがいなかったため、吉田との間にもうけた女児が最初の子である。

マンガ家としての伊藤は1987年に十代でデビューした。若くして商業誌に作品が掲載されたため、商業作家としての活動期間は夫の吉田戦車と然程変わらない。伊藤もギャグマンガ家として紹介されるが、吉田の作品とは異なり、家を買った経験や、美しくなる様々な手法を試行したことなど、実体験に基づく、自身を笑いの種にするような作品をかなりの数、出版している。

こうした吉田・伊藤が、自身らと、2010年生の娘、ベビーシッターの「N（ニシノ）さん」などを主要登場人物とし、出産と子育てに関するエピソードを綴ったマンガが、上述した吉田の『まんが親』と、伊藤の『おかあさんの扉』である。前者は青年誌である『ビックコミックオリジナル』（小学館）での連載作品『まんが親』を主体に単行本が構成されている。その中には、娘と入浴する際の出来事を描いた『フロマンガ』（『ビックコミックオリジナル増刊号』掲載）や、娘が生まれた後に節酒したエピソードを綴った『子供が生まれて何が変わったか』（文藝春秋の『CREA』2010年11月号掲載）、2011年3月の東日本大震災後のボランティア活動における裏話を記した『ふるさとの味』（エンターブレインの『月刊コミックビーム』2011年8月号掲載）、震災復興を願う吉田一家の姿を描いた『0歳児、北へ』（岩手県、岩手日報社の共同出版である『コミックいわて』2011年1月28日発売号掲載）、単行本刊行時の描き下ろしである『描き下ろしネコマンガ』が載せられている。ほとんどの作品が娘の成長や子育て時の様々なエピソードで構成されている。

伊藤の『おかあさんの扉』は、連載誌が『ビックコミックオリジナル』とは版元も、想定読者層も異なる主婦向けの『オレンジページ』（オレンジページ）で、単行本には、連載時の原稿に加筆されたものが掲載されている。

更に、吉田の単行本には伊藤が、伊藤の単行本には吉田が、それぞれ文章によるコメントが『伊藤の言い分』、『おとうさんの扉』と題して載っている。また吉田作品では文章による「あとがき」が、伊藤作品では文章とマンガによる「あとがきのようなもの」が掲載されている。これらは収録マンガ作品についての解説や後日談である。また『おかあさんの扉』には連載時の話に関連した1コママンガのような作品が挟まっている。これも内容

は後日談などである。『まんが親』の本編は３～４頁ほどの作品が１話分で、『おかあさんの扉』は１頁に２本掲載された３頁分、合計６本の四コママンガが一つのまとまりを構成している。

同じ娘、同じ夫婦、同じベビーシッターを描いていても、独立した作家同士であるため、絵柄が異なることは無論のこと、家族旅行など同じ体験談も、作家本人が述べるよう、その捉え方や細かなエピソードに差異があり、非常に興味深い題材となっている。これは、例えば彼らの娘の仮名にも表れ、吉田作品では「にゃーちゃん」、伊藤作品では「あーちゃん」という設定である。

娘が誕生し、一軒家に転居した後は、吉田も伊藤もマンガ制作の仕事場が自宅となった。そのため娘を幼稚園に預けるまでは、ほぼ丸一日、共に過ごすこととなっていたようだ。またベビーシッターが娘を預かる場所もほとんどが自宅か自宅周辺であり、会社勤めの親よりも、子どもと過ごす時間が長い夫婦である。そのため「保育内容」全般について学修したり、家庭との連携を探ったりする上で、好テキストともなっている。

次項以降では『まんが親』（１～４巻）、『おかあさんの扉』（１～５巻）に出てくる子育てのエピソードのうち、「保育内容」と関連するものを紹介し、考察する。伊藤には『週刊文春』で連載されている１コママンガを主体とした『おんなの窓』という単行本もあり、これにも子育ての話が掲載されているが[11]、本稿では扱わないこととした。

マンガに現れる保育内容「環境」と関連するエピソードとその考察

ここでは『幼稚園教育要領』及び「保育所保育指針」で示された「環境」の「ねらい」に基づいた「内容」の項目を分類し、吉田と伊藤の作品に出てくるエピソードを紹介しつつ、考察を行う。下の⑴、⑵などは幼稚園教育要領に該当するもの、①、②などは保育所保育指針にあるものである。紙幅に限りがあるため、エピソードの紹介は一部にとどめる。また当該エピソードの掲載部分は（吉 2-55）、（伊 1-7）のように表記する。「吉」は吉田作品の『まんが親』、「伊」は伊藤作品の『おかあさんの扉』、数字はハイフンの前が巻数、後が頁数である。例えば「伊 1-7」は『お母さんの扉』１巻７頁、「吉 2-55～58, 100」は吉田作品の２巻55頁から58頁と、100頁の意である。また「娘」は注釈を付けない限り、吉田・伊藤の女児を指し、「父」は吉田、「母」は伊藤、「両親」はその両者とする。

Ⅰ．人的・物的環境 ①

家庭における様々な活動で感覚の働きを富ませる「安心できる人的及び物的環境」の表れとして、子育てに苦心するエピソードが挙げられよう。具体的には、子どものために親が我慢し、出産前の生活を変化させ、様々な工夫をする話だ。「親の我慢」は一見子どもそのものとは無関係だが、別の角度から見れば、親が子どもにとって安心できる環境を作ることである。更にはこうした親の気遣いこそが安心できる人的環境そのものとも捉えら

れる。こうした経験は多数描かれているため、ここではベビーシッターを雇うまでの、幾つかの例を示す。例えば娘がハイハイをして危険箇所に行かないよう見守っていると、手間のかかる5本指靴下が履けないことだ（伊 1-5）。子どもはハイハイすることで景色が変わり、そのことにより見る感覚を豊かにし、場所により様々な音が聞こえることにも気付き、様々な物に触れ、手に取ったものを嗅ぎ、口に入れ、味わえるが、危険も伴う。大人の見守りがあってこそ、子どもは安全な環境で感覚を豊かにできるのである。また娘を寝かしつける際に母が通常はしない昼寝をし、急いで多くの食べ物を口に詰め込むなどの苦労も描かれている（伊 1-5）。他にも庭の朝顔の手入れができないことや（伊 1-6）、母乳のためにコーヒー豆を手挽きして飲むことを断念し、カフェインを含まないインスタントコーヒーに切り替えたこと（伊 1-7）なども記されている。これらも子どもが安心できる環境を親が努力し整えることの表れであろう。動き回る娘に障子を足で蹴破られることも覚悟し（伊 1-19）、ネギを折られ（伊 1-20）、本を齧られる（伊 1-21）など、大人にとり困ることも「初めて〇〇した」と客観的に捉え、家庭を安心できる環境にしている。

また母乳を与えるために3～4時間おきに毎回1時間ほども時間を使って疲れてしまい（伊 1-22）、さらには乳首が噛み切られて痛む（伊 1-23, 26）といった、文字通り痛々しい、身を切るような話も出ている。そして母の産後の辛さを補うように、父が家事の大部分を担い、娘の入浴係も引き受け、これらの過程で眼鏡を壊すほど献身したことも示されている（吉 1-19～20, 21, 24～25）。母乳を与える母親のみならず、父親の子育てへの関わりは、子どもが親を信頼できる基礎を作り、安全な食べ物を得ていく一助ともなっている。

父は、前述の通り離婚前に一女をなしたが、その長女と、娘の両者を思い、号泣したという（吉 1-32）。またおむつを替える際に娘が父の膝の上に尿を漏らし、「お父さんは人間便器だね」と母があやすこともあった（吉 1-77～78）という。こうした思いや排便排尿に寛容な姿勢も、子どもが安心できる環境を作り出す要因となるであろう。

Ⅱ．玩具・遊具・遊び ②、⑺、⑨

玩具や遊具、それらに類するものとの関わりも、非常に多く描かれている。ここでは娘が幼い頃の代表的な出来事を幾つか紹介し、考察する。

まず、年齢が上がるにつれ、玩具や遊具の話が多数出てくるが、満1歳前のエピソードは意外と少ない。玩具が散らばっている布団や畳の上に娘がいるだけの描写を除き、かつ玩具ではない危険なものを弄っているエピソードも含めると、以下の通りとなる。10か月頃に腹ばいの姿勢（伏臥）で玩具をいじり（吉 1-42）、舐める（吉 1-57）場面、横向きの姿勢（側臥）で太鼓の撥を齧る様子（伊 1-5）、仰向け（仰臥）で片手に撥、もう片方の手に積み木を握っている姿（伊 1-7）、寝転がりながら延長コードを触るうちに脚や腕に絡まってしまっていたこと（吉 1-49）であり、それらのみが描かれている程度だっ

た。座れるようになった後も、玩具を手に持つ描写や（吉 1-66）、本を手に持ち齧ったこと（吉 1-70）、４歳上の従姉が風船で遊ぼうと誘ってくれた時に風船の意味が分からず持つ様子（吉 1-76）のみだ。ただしお菓子の缶から布をどんどん引っ張り出す手作りの玩具で遊び、その玩具の穴に指を突っ込む様子は細かに描写されている（伊 1-27）。こうした描写の少なさはマンガ化する際、面白くないと判定された結果かもしれない。一方で、１歳になる前の玩具の遊び方は舐める、握る、触る、という、非常に単純で、なおかつ人間生活で最も基本的で重要な動きを促すものでもあることが巧く示されているとも謂えよう。

上記以外では、授乳時に吸っていない方の乳首を弄らせないために母が豚のぬいぐるみの尻尾を弄らせる場面（伊 1-26）もある。また、二歳になる前、娘が母乳をねだり、母を困らせていたところに、父が「シールがあるよ、あそぼ」と声を掛けた途端、そちらの方に走っていく、という話がある（伊 2-6）。離乳を進める上でも玩具の存在がかなり大きなものであることが分かるエピソードだ。

１歳を過ぎると両親を困惑させる玩具遊びが描かれるようになってくる。例えば本物の携帯電話や電卓、化粧品、運転免許証に強い関心を示し、両親の生活や仕事に支障をきたしかねないこと（伊 1-47）は、多くの親や保育士、教育関係者は思い当たるだろう。また親の思惑とは異なる方法で玩具遊びをするエピソードも描かれている。例えば描いた絵を何度も消せるボードを与えたところ、娘は、ボードの方ではなく、模様を付けるマグネットの丸型を気に入り、これで床面を叩いた（伊 1-48）。親が好む玩具について、興味を余り示さない話もある。例えば父がレールを自作し、これを坂道にし、車が速く下りる様子を見せたところ、娘は余り喜ばず、翌日レールを床に水平に置き、玩具を並べた（吉 1-90）。子どもは、大人の思惑通り玩具を使用せず、思わぬ使い方を工夫し、親とは異なる視点で物を捉え、新しい遊び方を工夫することを良く伝えている。

また鍵が当てはまらないところで何度も開けようと繰り返し（伊 1-87）、クローバーの葉を傘に見立てて頭にかざし（伊 1-105）、紙切れを電話に見立て、母親の電話中の様子を真似（伊 1-102）、ぬいぐるみに話し掛ける際、母親の話す言葉を使う（伊 1-103）など、単に物を弄るだけではない、知的な成長が窺える話も紹介されている。

また同じ道具を使い続け、遊びの幅が広がっていく例もある。それは小さな家庭用ビニールプールに入れられた時、そもそもプールに入ることが分からない状態から、座ったり立ったり遊んだりしても良く、水を入れるシャワーを花にやっても良いと知る場面だ（伊 1-95）。

Ⅲ．自然 ⑴、③、⑷、⑥

現代の日本では、病院や家屋で生まれ、過ごす時間の多くも屋内と保育所・幼稚園内である。この状況下、自然の様々な姿に触れる機会は得難いものである。両作品には、子ど

もが身近な自然に触れる機会や、遠方に出掛け自然に触れるチャンスを無意識に提供している場面も多々あり、ここではその一部を紹介する。

身近な自然では、落ちた桜の花びらを拾う話（伊 4-58～59）に限らず、他の様々な物を拾って親しむ様子が描かれた。例えば、幼稚園への通学路を急ぐ最中、3歳半の時にどんぐりを拾い（伊 4-9）、4歳になってものんびりとどんぐりを拾い（伊 5-13）、両親を焦らせた。一方で、5歳くらいでどんぐりに飽きる（伊 4-25）という成長ぶりも見せている。どんぐりは、他者との砂場遊びの際に「通貨」のように使われたこともある（伊 4-27）。自然の遊びを通して他者とも関わる好例である。

身近ではない特別な例も幾つか掲載されている。例えば1歳の娘を父が露天風呂に連れて行ったところ、空と鳥が飛ぶ姿が見えることを娘が気に入り3回も風呂に入らされたという（吉 2-6）。高知の旅行で訪れた海で波をかぶり、砂浜で遊ぶ経験をし（吉 2-89）、海水浴で水中覗き眼鏡で海底を覗き、（吉 4-29）、沖縄旅行でカヌーに乗り（伊 5-90）、カニを多数目撃し、美味しいパイナップルを食べ、民宿のヤモリを見、ウミヘビ・ヤシガニという珍しい動物を目撃し、オカガニの産卵も目にし（吉 4-101～106）という様々な経験も描かれた。吉田の実家である岩手県の祖父母宅で、娘が雪で遊ぶ話や（吉 2-46、3-84～85）（伊 4-42～46）、伊藤の実家がある長野県でスキーをしたこと（伊 4-48）など、冬の雪に親しんだ経験も披露されている。

このように、自然に親しむ育てられ方をしたため、娘がおならをした際、「お空にきこえた？」という詩的な発言もするようになり（伊 2-64）、また海水浴を目前にした晩、入浴中に、父の胸毛をワカメ、臍をウツボの巣に見立てたごっこ遊びをし（吉 4-118～120）、沖縄の西表島旅行から帰った後は、プールで他の人々を魚などに見立てて水中に潜る「西表島ごっこ」をする（吉 4-108）など、遊びに自然の体験を取り入れるという素晴らしい発想力も育った。

その他、蛇のぬいぐるみに、蛙のぬいぐるみを与えるという、食物連鎖を想起させる遊びや、サッカー選手の靴をモンガラカワハギの模様と同じだと指摘するなど（伊 5-6）、様々な自然に関する体験が幼児の生活を豊かにしていく様も描かれている。

Ⅳ．動植物・生命の尊さ（5）、⑦

子どもは身近な動植物に接してすぐに生命の尊厳を感じるとは限らない。様々な生き物との触れ合いを通じて、尊さに気付いていく。娘は、1歳を過ぎた後、アリジゴクの巣を突くことで、生き物の存在を面白い、と思い何度も突く動作を繰り返した（吉 1-107）。アリジゴクにはまさに地獄であるが、こうした想像力や共感はすぐに生まれない。年齢が上がるにつれ、玩具の虫を触りながら、「虫とトンボにてる？」と尋ね（吉 2-50）、動物園で幾つかの動物を見て飽き（吉 2-66～67）、川で鴨に餌遣りをしている人の様子を見（伊 3-30）、テレビで猪の蒐場での様子を観て真似たいと思い（伊 3-58）、料理される鳥

賊を見て「このイカに自由あった？」と尋ね（伊 3-71)、テレビで見たムササビの膜を羨ましがり（吉 3-16)、花やしきで初めてザリガニを釣り（吉 3-32)、カバに骨がないと父に主張し（吉 3-35)、タコ・イカ・象の鼻に骨があるかと尋ね（吉 4-15-16)、クロアゲハの幼虫が蛹になることをベビーシッターと楽しみに待ち（伊 4-104～105)、水族館で腸がはみ出たイカナゴを恐る恐るペンギンにやる体験をし（吉 4-5～７)、オオスカシバの虫が「どーんといる」と父に報告し（吉 4-19)、動物園でホッキョクグマの大きさを知り、ポニーに跨る体験をし（吉 4-47～48)、叔母夫婦の家の猫を肩に担いで連れ（伊 5-21)、カラスに上履きを盗まれ（伊 5-64)、小田原・箱根旅行で路地裏の猫と遭遇し（吉 4-74)、沖縄旅行でヤモリを見（吉 4-103)、と様々な動物を知っていったが、生命への畏敬の念が育まれている様子はまだ明確には見られない。

一方、動物の死に対する感情を身近な人の様子で目にすることもあった。祖母が飼っていたケンという犬が死んだ時、ケンをプリントしたＴシャツにお茶が掛かった様子を見て「ケンちゃんアツかったね」、「ケンちゃんいないね、死んじゃったね」と何気なく話し、祖母を泣かせた（伊 2-44～45)。動物を人間のように見立てるようにもなった。例えば、熊の絵がプリントされた水筒に自分の母乳を与えようとした（伊 2-96)。このように身近な人の悲しみを見、動物を擬人化する等、様々な体験を通じ、子どもは生命の尊さに徐々に気付いていくものだろう。

命の尊厳に気付くためには、もっと身近に触れ合え、家族のように過ごせる生き物が重要だ。娘にとり、猫を飼うことになったことは（伊 5-72～74, 77, 80, 94）強い影響を与えるに相違ない。家で子猫と共に過ごすことで、大喜びし、両親が猫に構うと嫉妬し（吉 4-90～92)、猫を弟妹のように見立て、共にごっこ遊びをし（吉 4-97)、「(猫が）私のこと好きなのかな」と言い、父から子猫のお姉ちゃんとして扱われ（吉 4-98～99)、生き物の対する情愛が育っていくであろう。

植物についても様々なエピソードが紹介されている。キウイやパイナップルを丸ごと初めて身近に目にし（伊 4-79～80)、トウモロコシを食べる際に、粒を繋げて芋虫の形を作り、工夫した齧り方でキノコ形に成形し（伊 4-91)、ポンカンの形を不思議に思い（伊 5-43)、主に食事やおやつを通じて知った植物の実に触れていく体験が綴られている。

Ｖ．身近な物を大切にする (6)、⑧

物にも魂を感じ、針供養や人形供養など、様々な儀礼をしてきた日本では、物品の擬人化は当然のことで、物を大切にすることと、生き物を大切にすることは通底している。娘がゼンマイ式船の動くさまを見て「がんばっているな」と話したことは（吉 4-117)、そのことを端的に示している。

また身近で大好きな人が大切にしている物に特別の思いを持つことも重要であろう。娘が２歳半を過ぎた後、突発性発疹で不機嫌になる症状を呈した時、苛立った父が、椅子に

投げ付けたエプロンに、娘が丁寧に手拭いを掛け、労わったことで、父が反省させられる、という場面がある（吉 2-105）。汚くなった犬のぬいぐるみに「ぷんかちゃん」という名を付けた後、別の名に変えようとしたところ、父から「同じ名前で通しなさい」と諭され納得し（伊 3-78）、これを連れた四歳の九州旅行中、居酒屋に置き忘れてしまい、母が必死に探す（伊 4-68～70）など、物を大切にする気持ちが両親からも伝わるであろうエピソードがある。

また父が大切にしている糠床を「お父さんの畑」と表現し（吉 2-78）、それを真似てタオルと玩具の皿で自身の「畑」ごっこをし（吉 2-79）、カレーを食べる際も糠漬けの真似をし（吉 2-102）、父を喜ばせた。母とお揃いの酒器でお茶を飲みたがったことも含め（吉 2-100）、親との繋がりが物との関係にも影響していることを示している。

こうした物にも魂があるような文化で育った娘は、2歳半を過ぎた後、指示されることなく粘土をきちんと片付けた（伊 2-93）。大切に片付ける、ということは物を大切にしている表れでもある。

Ⅵ．性質・仕組み・数量・図形・標識・文字 ⑵、④、⑻、⑩、⑼、⑪

知育玩具は様々なものがあるが、吉田・伊藤の家でもそれは使われている。特に文字に関しては興味深いエピソードが多数描かれている。2歳前には父が絵を見て取るカルタ遊びをするように仕向け（吉 2-30～31）、娘が適当な本を手に持ち、本を読んでいるような様子でお話を作り（伊 2-88）、酒瓶のラベルを読もうとし（吉 2-102）、外の看板にある「めまい」という文字を読み（伊 4-11）、3歳後半に母の名にある「り」を覚え、この文字がテレビ等で出てくると騒ぐようになり（吉 3-53）、かるた遊びを両親と楽しみ（伊 4-32）、ベビーシッターの推薦で買った五味太郎の『ヨメルカナ？かけるかな？』ポスターで文字を更に学習し、絵本を母に読み聞かせるまでになった（伊 4-57）。

読むだけではなく、5歳の誕生日プレゼントとして贈られたピアノに、文字を書いた紙を貼った上で、お店屋さんごっこをし（伊 5-36～37）、カレンダーの裏紙で本を作り（伊 5-47～49）、幼稚園の先生に手紙を書き（伊 5-52）、「きせつ」と記そうとした際に「けしき」と間違えて書く（伊 5-81）など、文字を積極的に書こうともした話も多々記されている。

平仮名ばかりではなく、粘土で漢字が書ける同級生について説明し（伊 5-66）、大叔父に手紙を書く際、「！」マークを使い（吉 4-75）、様々な文字・記号表現に関心を示すようになっていった。

文字が読めるようになると、カレンダーなどに記入した親の予定表を読め、期待していた予定がキャンセルされた際に騒ぐので、大人だけが分かる漢字で記すようになった顛末も披露されている（伊 5-69）。

数について、「ひとつ、ふたつ、みっつ…」の数え方につられ、「いつつ」を「ごっつ」

と読むエピソードは（伊 4-17)、間違いではあるものの、全くの出鱈目ではなく、一種の「法則」を理解していることの表れである。出先で会った見知らぬご老人の年齢を尋ねたことは（伊 5-39)、数量への関心を示す例だ。ダンゴムシの大群を、「100匹、 9 匹」と言い、父が述べた「5000匹」を100よりも少ないと否定する場面からは（吉 4-14)、大きな数字の多寡は分からずとも、大きそうな数字を理解しつつあることを示している。

平仮名同様、数字も読めるようになっていることもマンガで分かる。それだけではなく、7月のカレンダーに6月と8月が表示されている理由を「8月は楽しそうだから？ 6月は楽しかったから？」と興味深い推理を披露したエピソード（伊 4-83）は、物事の仕組みや因果関係に関心を持つようになったことの表れだ。

細長い便座シートを包帯に見立てたことも（吉 2-47～40)、形についての感性を表している。両親の職業柄、領収書とお金の交換を目にし、それを遊びに取り入れ（伊 3-35)、漬物器の構造を「ネズミ除け」と推理し（吉 3-91)、お弁当の米飯を、お握りにせず、「ひらたいごはん」にするよう要求し、平たいご飯はお握りよりも量が多いことを実感し、お握りに戻すよう依頼した（伊 4-60, 63, 72）エピソードは、様々な物事に仕組みがあることや、形と量の関係を考えていることの証左である。

Ⅶ. 季節と自然・人間の生活の変化 ⑶、⑤

幼い子どもは季節と自然、生活の変化を様々な年中行事を通じて感じるように育ち、一年全体の変化をその積み重ねで知っていく。娘が2歳の春、雛祭りで雛人形を怖がり（伊 2-47)、3歳でお内裏様の持つものに興味を持ち（吉 3-14)、4歳で雛祭りをしたか見知らぬ人に尋ねられた（伊 4-49)、という体験が紹介されている。夏のエピソードでは、2歳の時、幼稚園で七夕短冊を作って貰い（伊 2-86)、水着や浴衣を着（伊 2-92)、祖母が縫ってくれた浴衣が合わなくなるほど育ったことや（伊 2-98)、3歳の夏に幼稚園の夏休みを経験し、海を怖がり（吉 3-49～51)、バーベキューをし、家にビニールプールを買って貰い、祖母の家にも出かけ、イトコとも遊び、牧場のヤギも見るなど（伊 3-89～99)、様々な体験をしたことも挙げられている。また夏休みも、海水浴に行くことが恒例となる（伊 4-94～97)。秋から冬にかけては、3歳で七五三の着物を着せられるのを嫌がり（伊 3-27)（吉 2-103)、クリスマス会に参加し（伊 3-30)、ベビーシッターの家族と新年会をし（伊 3-32)、年末で紅白歌合戦を見て感化され（伊 3-34)、4歳でも、クリスマスプレゼント（伊 4-30）を貰い、よその家にクリスマスの飾りをしてあるか否かの確認をするようになり（伊 5-23)、年末祖父母宅でアクシデントが起き、単独で放置されている間に眠り込む（伊 5-32)、という話が紹介されている。また1月生まれの娘は、3歳の誕生日、「恋人」に花を贈られ（伊 3-34)、誕生パンケーキを焼いて貰い（伊 3-36)、誕生祝ケーキを直ぐに食べたくなり蝋燭を瞬時に取り去り（吉 3-13)、4歳の誕生日は自転車を贈られ大喜びで練習し（伊 4-34～37)、前年同様、「恋人」が花を持ってきてくれ、

幼稚園の誕生会も経験し（伊 4-40）、5歳の誕生日にピアノを贈られた（伊 5-34～36）。以上のように、雛祭り、七夕、浴衣、海水浴と水着、クリスマス、年末年始等、非日常的な行事を毎年繰り返し体験することで、季節と生活の変化を実感するようになるだろう。そしてその積み重ねで一年の周期を理解するようになるのだろう。

Ⅷ. 情報・施設・近隣の生活・行事・国旗 ⑽、⑾、⑫

生活に関する情報のうち、娘が宅急便の配達員に関心を抱く様子を例に出そう。1歳を過ぎた、発音がままならない頃、玄関前にいる配達員を「たっこびんしゃん」と指差しし（吉 2-10）、オムツを交換中に配達員に礼を述べに出（伊 2-51）、2歳頃にイトコの説明をする際に親族名称だけでなく「宅急便さん」を混ぜ（伊 2-51）、貰った宅急便車の玩具を動かしながら「おならのくささ」を運んでいると答える（伊 3-30）など、高い関心を示すとともに、何かを運ぶものだとも理解していることが伝わる描写がある。娘は年長になる前、配達員に「今度、年長になるの」と宣言するなど（伊 5-54）、交流もするようになった。

無論、テレビ、ラジオ、電話など家庭で両親が使うものに対する関心も高い。テレビやラジオの交通情報やニュースを読むアナウンサーの物真似（吉 2-47、3-72）、電話で話す真似（伊 1-102）（吉 2-15, 47, 62、3-20～21）など、音声が流れ、流すものだと理解し、遊ぶ姿も描かれている。メールのことも知り、メールチェックを「めーうちっく」と述べたこともある（吉 2-107）。文字が書けるようになると携帯電話の玩具を自作するようにもなった（吉 4-53）。

家庭外でも親が利用するタクシーで運転手に頼むように、親の運転する車で出鱈目な指示を出したこともある（吉 2-85～86）。また病院にも関心を示し、注射や傷口の処理の真似などをし（吉 2-106、3-7）、父が怪我した傷でも病院ごっこをしようとした（吉 3-22, 51）。ただし長じてからは病院ごっこをしなくなった（吉 3-97、4-88～89）。ごっこ遊びからは、回転ずしや廃品回収などを理解しつつあることも分かる（吉 4-89）。

幼稚園の2歳児クラスに入る前、施設を含む、娘の頭の中にあるものが一覧図として描かれているが、家、ベビーシッター一家、両親の実家、電車・バス、公園、病院、川、スーパー、デパートくらいしかない（吉 2-68）。その後、幼稚園（伊 2-70）、託児所代わりのスイミングスクール（伊 3-39～42）や英語で遊ぶ託児所（吉 2-91）、玩具図書館（伊 3-30）、音楽教室（伊 5-60）など、外の施設で過ごす時間も増えていく。

両親が辛くなるほど公園などの外遊びも好きになり（伊 3-16）、旅先の物足りなさと近所の思い切り遊べる公園を比べ、後者に行くと主張する（吉 4-73～74）など身近な公園も良く知り親しんでいる様子も窺える。

幼稚園に通うようになると、初登園時にお洒落をしつつも、登園を嫌がり、親を困らせ（伊 2-72～74）、家で行う幼稚園ごっこでも自身はいつも欠席という設定にするなど（伊

3-102～105）苦手意識がありながら、それ以上に泣き叫ぶ友人の手を引いて登園し（伊 4-5）、誕生会や運動会などにも参加し（伊 3-14、4-10）、4歳になれば家で運動会の練習をし（伊 5-11）、終了後も踊りを家で踊る（伊 5-14）までになった。クリスマス会も自分の役柄を楽し気に伝え（伊 5-17, 19, 28）、その練習にも励んだ（伊 5-27, 29）。節分の鬼の角づくりも頑張り（伊 5-41）、前年度の遠足を写真で振り返り（伊 5-65）、というように様々な行事に親しんでいる様子も描かれている。

上記のように描かれた如く、子どもは公園を含む様々な施設に通い、宅急便やタクシーを含む生活と密接に関わる事物を知り、生活することとは何かを徐々に学んでいくのだろう。

また娘が「わたし日本人だからラジオ体操がやれない」（吉 3-11）と述べ、幼稚園の運動会でベトナムの国旗を描く（吉 4-43）などの体験もし、日本と海外のことも少しずつ学ぶようになっている様子も紹介されている。

「保育内容」におけるマンガ活用の意義

前項では『まんが親』と『おかあさんの扉』に描かれた保育内容「環境」に関わるエピソードを抜粋して紹介したが、「環境」以外にも多数の例が読み取れる。以下、他領域について一部を記す。

「健康」関連では、初めて見る鮒寿司も好奇心を持って食べる（吉 2-25）など、好き嫌いをしない子になった（伊 2-72）。抱っこに頼らず歩くという宣言や（吉 2-36）、卒乳宣言もし（伊 3-10）、自ら健康な生活を送ろうとする力が養われている様子が窺える。登り棒の登頂を諦めることもあったが（吉 4-96～97）、できなかった雲梯もできるようになり（吉 4-76）、自転車にも乗れるようになった（吉 4-80）。顔に水がかかることを極端に嫌っていたが、スイミング教室の効果や親の努力もあり、自分でシャワーができるようになった（吉 3-66～67）。生活リズムも、就寝前に歯磨きをした後、父に負ぶって貰い布団のある場へ行き、そこで戦いごっこをし、次に母に絵本を読んで貰って寝る（吉 4-55）と整ったことも描かれている。

「人間関係」に関するエピソードも非常に多い。幼い頃は同年輩の子どもたちが苦手で（吉 1-118、2-18～20）、また前項で記したように幼稚園にも「行きたくない」と泣き叫んでいたが、年長組になると年下の子の世話をするように成長した（伊 5-68）。父を叩きたい欲求にかられ頬を叩く（吉 2-80）、小さな嘘を付き一緒に遊ぶ子を差別する（吉 3-17～19）など人間関係を壊すようなこともしているが、周りに諭されている様も紹介されている。餅が二つしかない時、それらはお母さんと自分のもので、お父さんにはない、と父を仲間外れにした後、母にミートボールを持って行って貰い、仲直りをはかる（吉 3-28）など、人間関係の修復方法も身に付けつつあることも示されている。公園で出会った見知らぬ男子とすぐに仲良く遊ぶが、一方で嫌なことを言う幼稚園の男児と遊ばないこと、後

日、その男児と一緒に昼食を食べる（吉 3-76～79）など、同年輩の他者との関わりや距離の取り方を示す話もある。プール遊び中に父の指示をうるさいと思いつつも、そう述べず、「早く帰る」と発言し（吉 4-32～33）、おやつのアイスが半分のみということに不満を直接言わず、「アイスが腐るから勿体ない」と伝える（吉 4-33）など、駆け引きができることも記されている。幼稚園で「協力」を学び（吉 4-16）、5歳になった頃、母に甘えたい気持ちを抑え、仕事を邪魔しないという形の「協力」に励む姿も描かれている（吉 4-61～63）。

「言葉」についても、幼く愛らしい口語表現で様々なことを伝えようと苦心し（伊藤 1-90～92）、「ときどきは、な」と大人っぽい口をきく（吉 3-35）、『いつでも夢を』の曲を聴き、「いつでもおだんごの夢を見るということか」と尋ね（吉 3-68）、朝の連続ドラマに出てくる方言の真似をし（吉 3-120）、等々、言語の感性と表現の力を発達させているエピソードは数多い。人間関係とも深く関わる会話も多数挙げられ、例えば怪獣の名ばかりを教えたことを謝る父に「どいたしまして」と答えたという（吉 3-123）。優雅な表現である「ごきげんよう」や、女らしいとされる文末に付ける「わ」に憧れる話もある（吉 4-23～24）。父が「わ」を使うと、それを変だと思う気持ちを「何それ」と表す（吉 4-39）など、他者の言葉を査定する様子も描かれている。5歳前には頓珍漢な発言が減り（吉 4-52）、友人らにお手紙を書く（吉 3-98）といった、「正しい言葉」や「書き言葉」への関心が窺える話もある。

「表現」についても多数の例がある。1歳7カ月の時、4カ月のイトコに会い、その時のことを「イイコ」「ネンネ」「エーン」と表現し（伊 1-99）、不機嫌で泣いている際、定番音楽をかけると泣きながら踊り（伊 1-102）、クローバーを傘に見立てた姿で「かしゃー（傘）」と言い（伊 1-105）、2歳になったばかりで冷たい物を「あつい」と述べた後、自身で「あ、冷たい、だ。間違い（え）た」と訂正するなど、言葉がまだ巧く操れなくとも、様々な表現をしたことが紹介されている。裸を父に見せに行く時に「はだかっち」と叫び（伊 3-68～69）、うっかりパンツを穿いてしまい、シャツやズボンまで着用した後は「ぱんつっち」「シャツっち」「ズボンっち」と言葉を作り（伊 3-75）、風に吹かれたことを「風がお化粧してくれた」、風が強い様子を「風曜日だね」と美しく表現し（伊 3-70）、また別の時は即興の意味が通じない歌を歌い（伊 2-60、3-34, 39）、適当な本を持ち即興の「桃太郎」のお話を口頭で述べ（伊 2-88）、満腹で辛い父が食事を軽い「うどんにしておく」と述べたことに対し「うどんは薬？」と尋ね（伊 2-103）、身近な人の干支を話している時にビール好きの母を「お母さんはビール年」と述べる（伊 3-13）など、創造性を発揮した話も興味深い。ダンゴムシの大群を見て、面白くてぞわぞわする気持ちを「うずずず」（吉 4-14）と擬態語で表現したこともある。長い髪に憧れ、タオルをカチューシャで止めロングヘアを演出する工夫や（伊 4-16）、父の作った三つ編み紐を頭髪につけ、長い髪の少女になったこと（吉 4-54）等、言葉以外の表現も描かれている。無論、

人間故に悪いこともするようになる。オムツの中にウンチをしていても「していない」と誤魔化し（伊 2-35）、大好きな甘栗を他者に取られまいと「辛いよ」と嘘を吐くようにもなった（伊 2-45）。また誕生会には大好きなケーキが出ることを理解し、家族の誰も誕生日のない月に「誰か誕生日の人いる？」と尋ね、叔母がそうだと知ると「叔母ちゃんを呼んでお祝いしてあげよう」と高等な「ケーキ獲得戦術」を披露する場面が描かれている（伊 4-6）。それ以外にも、親の気を惹くために故意に食べ物を落とし（吉 3-64～65）、海水浴から帰りたくないとダダを捏ねる時、昆虫の名前を尋ねながら引き留めようとし（吉 3-51）、父が相手をしてくれない時に癇癪を起して走り去る（吉 3-60）、など様々な場面も描かれている。

以上のように様々なエピソードが記されている育児マンガは、子どもの愛らしい面も、好ましくない面も含み、子ども、というよりは人間の総合的な真の姿と成長を巧く表す好テキストである。このような作品を読むことは、子どもに深く関わったことのない学生にとり、保育内容の授業と教科書や参考書などを理解する上で、大きな助力となるであろう。

本稿で採り上げたエピソードは一部に過ぎず、両作品には他にも非常に興味深い事例が多数詰まっている。他のマンガ家にも、それぞれ、様々な個性を有した子どもたちの成長発達を描いた作品がある。戯画化された姿にせよ、実際の子どもを題材に描いた作品群を利用し、学修を進め、授業外の自学で活用することをすすめたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、名古屋芸術大学人間発達学部の先生方にご示唆を頂いた。また書籍を貸していただくなど、大変お世話になった。また編集と出版の労をとって下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝したい。

文献および註

1）文部科学省、2008、幼稚園教育要領（平成21年から施行）
2）厚生労働省、2008、保育所保育指針（平成21年から施行）
3）別冊宝島編集部、2003、あさきゆめみし Perfect Book、宝島社。2008に同社で文庫化。
4）吉田戦車、2011、2013、2014、2015、まんが親１～４巻、小学館
5）伊藤理佐、2012、2013、2014、2015、2016、おかあさんの扉１～５巻、オレンジページ
6）アニメーション作品や、現在のゲームもマンガと同様であろう。
7）子育てエッセイマンガ作品で大ヒットした作品として、まついなつき、1994、笑う出産、情報センター出版局が挙げられる。
8）石坂啓、1993、赤ちゃんがきた、朝日新聞社。後文庫化。
9）西原理恵子『毎日かあさん』（毎日新聞出版）や、東村アキコ『ママはテンパリスト』（集英社）など多数。
10）てぃ先生、ゆくえ高那、2015、2015、2016、てぃ先生１～３、KADOKAWA/ メディアファクトリー
11）伊藤理佐、2007、2008、2010、2012、2016、おんなの窓１～５、文藝春秋